

日本近 现代文学 作品选读

主编 马乐
审校 陈刚

副主编 吕端



WUHAN UNIVERSITY PRESS

武汉大学出版社

目 录

日本近现代文学 作品选读

主编 马乐
副主编 吕端
审校 陈刚



图书在版编目(CIP)数据

日本近现代文学作品选读:日文/马乐主编.—武汉:武汉大学出版社,
2018.12

ISBN 978-7-307-19563-9

I.日… II.马… III.①日语—阅读教学—高等学校—教材 ②日本
文学—作品综合集—近现代 IV.H369.4:I

中国版本图书馆CIP数据核字(2018)第273381号

责任编辑:罗晓华

责任校对:李孟潇

版式设计:马佳

出版:武汉大学出版社 (430072 武昌 珞珈山)

(电子邮件:cbs22@whu.edu.cn 网址:www.wdp.com.cn)

印刷:武汉市宏达盛印务有限公司

开本:787×1092 1/16 印张:17.25 字数:321千字 插页:1

版次:2018年12月第1版 2018年12月第1次印刷

ISBN 978-7-307-19563-9

定价:48.00元

版权所有,不得翻印;凡购买我社的图书,如有质量问题,请与当地图书销售部门联系调换。

前 言

本书是为大学日本语言文学专业本科高年级学生编写的日本文学选读教材。也可作为日语学习者提高日语阅读水平、了解日本近现代文学的读本使用。

高等院校日语专业文学相关课程大多采用传统的教学方法，即单纯灌输知识，这样既不利于增加学生课后的阅读量，又难以培养学生自主阅读的习惯。同时，由于日本文学选读课程涉及的作家和作品较多，而课程学时有限，学生容易在课堂上机械听课，最终导致文学课程收获不大，因此被学生忽视。编者长期致力于日本文学课程的教学，在教学改革方面进行了一系列的尝试，获得了较好的课堂教学效果和评价。本教材立足于充分调动学生主体作用的教学理念，帮助学生在“悦读”中提高日语语言能力和研究能力。

本书共收录日本近现代名篇佳作 14 部，包含了各个时期不同流派的作品，其中 6 位作家在日本近代文学史上影响深远，故于附录增加了其他短篇名作，以供阅读学习。为利于学生阅读与理解，每篇作品（部分为节选）均附有日文注释、作者简介与作品简介。思考问题和参考文献的设置为学生提供了研究角度和线索，以期学生能够通过赏析名作，进而了解文学作品解读和研究的方法，提高其赏析文学作品的能力。另外，教材还附有日本近代文学年表，增加了与大学日语专业八级考试相关的文学常识题目，有利于提升学生的综合文学素养，也可作为本教材使用后的自评。

本教材在编写过程中得到了各级领导的关心和帮助，特别是得到江汉大学外国语学院日语系各位同仁的大力支持，日语系主任陈刚老师在百忙之中对教材进行了审阅和校对，湖北大学日语系吕端老师作为副主编也在编写上帮助良多，在此一并表示由衷的感谢。最后，还要感谢我的家人，尤其是父母一直以来给予我的支持与鼓励。

本人的编写初衷是为了让学生愉快地阅读日本近现代的文学作品，而不是枯燥地进行填鸭式学习，因此，希望学生能根据自己的兴趣及水平选择喜爱的作品进行阅读、研究。由于编者本人水平有限，错误与不足在所难免，欢迎各位使用者批评指正、提出宝贵意见。

马乐

2018年8月

目次

第一課 破戒	島崎藤村	1
注釈		11
作者紹介		12
解題		12
思考問題		12
参考文献		13
第二課 吾輩は猫である (抄録)	夏目漱石	14
注釈		28
作者紹介		29
解題		30
思考問題		30
付録		31
ころ (抄録)		31
参考文献		34
第三課 刺青	谷崎潤一郎	36
注釈		43
作者紹介		44
解題		45
思考問題		45
参考文献		45
第四課 羅生門	芥川龍之介	47
注釈		54
作者紹介		54
解題		55
思考問題		56

付録	56
羅生門の後に	56
杜子春	58
参考文献	70
第五課 高瀬舟	森鷗外 72
注釈	81
作者紹介	83
解題	83
思考問題	84
付録	84
高瀬舟縁起	84
参考文献	86
第六課 注文の多い料理店	宮沢賢治 87
注釈	95
作者紹介	95
解題	96
思考問題	96
付録	97
『注文の多い料理店』序	97
『注文の多い料理店』新刊案内	97
〔雨ニモマケズ〕	100
どんぐりと山猫	101
参考文献	110
第七課 セメント樽の中の手紙	葉山嘉樹 111
注釈	114
作者紹介	115
解題	116
思考問題	116
参考文献	116
第八課 檸檬	梶井基次郎 118
注釈	124
作者紹介	124

19	解題	125
89	思考問題	125
00	参考文献	126
005		
第九課	蠅	横光利一 127
10	注釈	133
10	作者紹介	134
80	解題	134
	思考問題	135
01	付録	135
435	頭ならびに腹	135
36	参考文献	140
525		
第十課	二銭銅貨	黒島伝治 141
38	注釈	145
	作者紹介	146
40	解題	146
32	思考問題	147
	参考文献	147
第十一課	風立ちぬ (抄録)	堀辰雄 148
	注釈	161
	作者紹介	162
	解題	163
	思考問題	163
	参考文献	163
第十二課	走れメロス	太宰治 165
	注釈	176
	作者紹介	177
	解題	177
	思考問題	177
	付録	178
	人間失格(抄録)	178
	参考文献	190

第十三課 名人伝	中島敦	191
注釈		198
作者紹介		200
解題		200
思考問題		201
付録		201
山月記		201
参考文献		208
第十四課 白痴	坂口安吾	210
注釈		234
作者紹介		236
解題		237
思考問題		238
参考文献		238
付録 日本近代文学年表		240
日本文学史総合問題(大学日本語専攻生八級能力試験関係)		252

第一課 破 戒

島崎藤村

第一章

(一)

蓮華寺れんげじでは下宿を兼ねた。瀬川丑松うしまつが急に転宿やどがえを思い立って、借りることにした部屋というのは、其蔵裏くりつづき^①にある二階の角のところ。寺は信州^②下水内郡飯山町二十何ヶ寺の一つ、真宗^③に附属する古刹こせつで、丁度其二階の窓に倚凭よりかかって眺めると、銀杏の大木べだを経て飯山の町の一部も見える。さすが信州第一の仏教の地、古代めのまえを眼前に見るような小都会、奇異な北国風の屋造、板葺の屋根、または冬期の雪除ゆきよけとして使用する特別の軒庇のきびさしから、ところどころに高くあらわ 顕れた寺院と樹木の梢まで——すべて旧めかしい町の光景ありさまが香の烟の中に包まれて見える。ただ一際目立って此窓から望まれるものと言え、現に丑松が奉職して居る其小学校の白く塗った建築物たてものであった。

丑松が転宿を思い立ったのは、実は甚だ不快に感ずることが今の下宿に起ったからで、尤ももつと 賄まかないでも安くなければ、誰も斯様な部屋に満足するものは無かろう。壁は紙で張りつめて、それが煤けて茶色になって居た。粗造な床の間^④、紙表具の軸、外には古びた火鉢が置いてあるばかりで、何となく世離れた、静寂しずかな僧坊であつた。それが

また小学教師という丑松の今の境遇に映って、妙に^{わび}恹しい^{かんじ}感想を起させもする。

今の下宿には斯ういう事が起った。半月程前、一人の男を供に連れて、下高井の地方から出て来た大日向という大尽、飯山病院へ入院の為とあって、暫時腰掛に泊って居たことがある。入院は間もなくであった。もとより内証はよし、病室は第一等、看護婦の肩に懸って長い廊下を往ったり来たりするうちには、自然と豪奢が人の目にもついて、誰が嫉妬で噂するともなく、「彼は穢多^⑤だ」ということになった。忽ち多くの病室へ^{つたわ}伝^{そうだち}って、患者は総立。「放逐して^{しま}了え、今直ぐ、それが出来ないとあらば吾儕^{われわれこそ}挙つて御免を蒙る」と腕捲りして院長を脅^{おびやか}すという騒動。いかに金尽でも、この人種の^{へんしゆう}偏執には勝たれない。ある日の暮、籠に乗せられて、夕闇の空に紛れて病院を出た。籠は^{そのまま}其儘^{かつ}もとの下宿へ^か昇ぎ込まれて、院長は毎日のように来て診察する。さあ今度は下宿のものが承知しない。丁度丑松が一日の勤務を終って、^{つとめ}疲れて宿へ帰った時は、一同^{かみさん}「主婦^{わめ}を出せ」と喚き立てるところ。「不浄だ、不浄だ」の罵詈は無遠慮な客の^{くちびる}口唇を衝いて出た。「不浄だとは何だ」と丑松は心に憤って、蔭ながらあの大日向の^{ふしあはせ}不幸を憐んだり、^{いわれ}道理のないこの非人扱いを^{なげ}慨いたりして、穢多の種族の悲惨な運命を思いつづけた——丑松もまた穢多なのである。

見たところ丑松は純粹な北部の信州人——^{さくちひさがた}佐久小県あたりの岩石の間に成長した^{わかもの}壯年の一人とは誰の目にも受取れる。正教員という格につけられて、学力優等の卒業生として、長野の師範校を出たのは丁度二十二の^{とし}年齢の春。社会へ^{よのなか}突出される、直に丑松はこの飯山へ来た。それから足掛三年目の今日、丑松はただ熱心な青年教師として、飯山の町の人に知られて居るのみで、実際穢多である、新平民であるということは、誰一人として知るものが無かったのである。

「では、いつ引越していらっしやいますか。」

と声をかけて、入って来たのは蓮華寺の住職の^{つれあい}匹偶^⑥。年の頃五十前後。茶色小紋の

羽織を着て、瘦せた白い手に珠数を持ち乍ら、丑松の前に立った。土地の習慣から『奥様』と尊敬められて居る斯の有髪の尼は、昔者として多少教育もあり、都会の生活も万更知らないでも無いらしい口の利き振であつた。世話好きな性質を額にあらわして、微な声で口癖のように念仏して、相手の返事を待つて居る様子。

其時、丑松も考えた。明日にも、今夜にも、と言いたい場合ではあるが、さて差当つて引越しするだけの金が無かつた。實際持合せは四十銭しかなかつた。四十銭で引越しの出来よう筈も無い。今の下宿の払いもしなければならぬ。月給は明後日でなければ渡らないとすると、否でも応でも其迄待つより外はなかつた。

「斯うしましょう、明後日の午後ということにしましょう。」

「明後日？」と奥様は不思議そうに相手の顔を眺めた。

「明後日引越すのは其様に可笑いでしょうか。」丑松の眼は急に輝いたのである。

「あれ——でも明後日は二十八日じゃありませんか。別に可笑いということは御座ませんがね、私はまた月が変つてから来っしやるかと思ひましてサ。」

「むむ、これはおおきに左様でしたなあ。実は私も急に引越しを思い立ったものですから。」

と何気なく言消して、丑松は故意と話頭を変えて了つた。下宿の出来事は烈しく胸の中を騒がせる。それを聞かれたり、話したりすることは、何となく心に恐しい。何か穢多に關したことになる、毎時もそれを避けるようにするのが是男の癖である。

「なむあみだぶ。」

と口の中で唱えて、奥様は別に深く掘つて聞こうとしなかつた。

(二)

蓮華寺を出たのは五時であつた。学校の日課を終ると、直ぐ其足で出掛けたので、丑松はまだ勤務の儘の服装で居る。白墨と塵埃とで汚れた着古しの洋服、書物やら手帳や

らの風呂敷包を小脇に抱えて、それに下駄穿、腰弁当。多くの労働者が人中で感ずるような羞恥——そんな思を胸に浮べ乍ら、鷹匠 町の下宿の方へ帰って行った。町々の軒は秋雨あがりの後の夕日に輝いて、人々が濡れた道路に群って居た。中には立ちとどまって丑松の通るところを眺めるもあり、何かひそひそ立話をして居るのもある。「彼処へ行くのは、ありゃあ何だ——むむ、教員か」と言ったような顔付をして、酷しい軽蔑の色を顕して居るのもあった。是が自分等の預って居る生徒の父兄であるかと考えると、浅猿しくもあり、腹立たしくもあり、遽に不愉快になってすたすた歩き初めた。

本町の雑誌屋は近頃出来た店。其前には新着の書物を筆太に書いて、人目を引くように張出してあった。かねて新聞の広告で見て、出版の日を楽しみにして居た『懺悔録』——肩に猪子蓮太郎氏著、定価までも書添えた広告が目につく。立ちどまって、其人の名を思出してさえ、丑松はもう胸の踊るような心地がしたのである。見れば二三の青年が店頭みせさきに立って、何か新しい雑誌でも猟あさって居るらしい。丑松は色の褪せたズボンの袖囊の内へ手を突込んで、人知れず銀貨を鳴らして見ながら、幾度か其雑誌屋の前を往ったり来たりした。兎に角、四十銭あれば本が手に入る。しかし其を今茲ここで買って了えば、明日は一文無しで暮さなければならぬ。転宿の用意もしなければならぬ。斯ういう思想かんがえに制せられて、一旦は往きかけて見たようなものの、やがて、復た引返した。ぬつと暖簾のれんを潜って入って、手に取って見ると——それはすこし臭気においのするような、粗悪な洋紙に印刷した、黄色い表紙に『懺悔録』としてある本。貧しい人の手にも触れさせたいという趣意から、わざと質素な体裁えらを拵んだのは、是書の性質をよく表して居る。ああ、多くの青年が読んで知るといふ今の世の中に、飽くことを知らない丑松のような年頃で、どうして読まず知らずに居ることが出来よう。智識は一種の饑渴ひもじさである。到頭四十銭を取出して、欲ほしいと思う其本を買求めた。なけなしの金とはい

乍ら、精神の慾には替えられなかったのである。

『懺悔録』を抱いて——買って反って丑松は気の衰頹を感じ乍ら、下宿をさして帰って行くと、不図、途中で学校の仲間に出逢った。一人は土屋銀之助と言って、師範校時代からの同窓の友。一人は未だ極く年若な、此頃準教員に成ったばかりの男。散歩とは二人のぶらぶらやって来る様子でも知れた。

「瀬川君、大層遅いじゃないか。」

と銀之助は洋杖を鳴し乍ら近いた。

正直で、しかも友達思いの銀之助は、直に丑松の顔色を見て取った。深く澄んだ目付は以前の快活な色を失って、言うに言われぬ不安の光を帯びて居たのである。「ああ、必定身体きつとからだの具合でも悪いのだろう」と銀之助は心に考えて、丑松から下宿を探しに行った話を聞いた。

「下宿を？ 君はよく下宿を取替える人だねえ——此頃あそこの家へ引越したばかりじゃないか。」

と毒の無い調子で、さも心から出たように笑った。其時丑松の持って居る本が目についたので、銀之助は洋杖を小脇に挟んで、見せろという言葉と一緒に右の手を差出した。

「是かね。」と丑松は微笑みながら出して見せる。

「むむ、「懺悔録」か。」と準教員も銀之助の傍に倚よりそ添いながら眺めた。

「相変らず君は猪子先生のものが好きだ。」斯う銀之助は言って、黄色い本の表紙を眺めたり、一寸内部なかを開けて見たりして、「そうそう新聞の広告にもあったッけ——へえ、斯様な本かい——斯様な質素な本かい。まあ君のは愛読を通り越して崇拜の方だ。はははは、よく君の話には猪子先生が出るからねえ。嘸かしまた聞かせられることだろうなあ。」

「馬鹿言いたまえ®。」

と丑松も笑って其本を受取った。

夕靄の群は低く集って来て、あそこでも、ここでも、最早ちらちら^{あかり} 灯^つが点く。丑松は明後日あたり蓮華寺へ引越すという話をして、この友達と別れたが、やがて^{すこし}少許行って振返って見ると、銀之助は往来の片隅に佇立んだ儘、^{たたく} 熟^{まま}と是方を見送って居た。半町^⑨ばかり行って復た振返って見ると、未だ友達は同じところに佇立んで居るらしい。

夕餐の煙は町の空を籠めて、^{しんぼり} 悄然とした友達の姿も^{たそが} 黄昏れて見えたのである。

(三)

鷹匠町の下宿近く来た頃には、^{かね} 鉦^{をちこち}の音が遠近の空に響き渡った。寺々の宵の^{おつとめ} 勤行は始まったのであろう。丁度下宿の前まで来ると、あたりを^{いまし} 警める人足の声も聞えて、^{ちようちん} 提灯の光に宵闇の道を照し乍ら、一^{ちよう} 挺の籠が昇がれて出るところであった。ああ、大尽が忍んで出るのであろう、と丑松は憐んで、^{もくねん} 黙然として其処に突立って見て居るうちに、いよいよ其とは附添の男で知れた。同じ宿に居たとは言い乍ら、ついで丑松は大日向を見かけたことが無い。唯附添の男ばかりは、よく葉の纏なぞを提げて、出たり入ったりするところを見かけたのである。その雲を突くような大男が、今、尻端折^⑩り、主人を保護したり、人足を指図したりする甲斐々々しさ。穢多の中でも^{いや} 卑賤しい身分のものと見え、其処に立って居る丑松を同じ^{やから} 種族とは夢にも知らないで、妙に人^{はばか} を憚るような様子して、一寸会釈し乍ら側を通りぬけた。門口に^{かみさん} 主婦、「御機嫌よう」の声も聞える。見れば下宿の内は何となく騒々しい。人々は激昂したり、憤慨したりして、いずれも聞えよがしに罵って居る。

「難有うぞんじます——そんなら御気をつけなすって。」

とまた主婦は籠の側へ駈寄って言った。籠の内の人は何とも答えなかった。丑松は黙って立った。見るみる昇がれて出たのである。

「ざまあ見やがれ。」

これが下宿の人々の最後に掲げた凱歌であった。

丑松がすこし蒼ざめた顔をして、下宿の軒を潜って入った時は、未だ人々が長い廊下に群むらって居た。いずれも感情を制えきれないという風で、肩を怒らして歩くもあり、板の間を踏み鳴らすもあり、中には塩を掴んで庭に蒔ま散らす弥次馬もある。主婦は燧石ひうちいしを取出して、清浄きよめの火と言って、かちかち音をさせて騒いだ。

哀憐あわれみ、恐怖おそれ、千々の思は烈しく丑松の胸中を往来した。病院から追われ、下宿から追われ、其残酷な待遇とりあつかいと恥辱はずかしめとをうけて、黙って昇がれて行く彼のあ大尽の運命を考えると、囃籠なげきの中なかの人は悲慨なんだの血涙むせに噎やがんだであろう。大日向の運命は臆おそてすべての穢多ひとごとの運命である。思えば他事では無い。長野の師範校時代から、この飯山に奉職の身となったまで、よくまあ自分は平氣の平左で、普通の人と同じような量見で、危いとも恐いとも思わずに通り越して来たものだ。斯うなると胸に浮ぶは父のことである。父というのは今、牧夫をして、烏帽子えぼしヶ嶽だけの麓ふもとに牛を飼って、隠者のような寂しい生涯を送って居る。丑松はその西乃入牧場にしのにいりを思出した。その牧場の番小屋を思出した。

「阿爺おとつさん、阿爺さん。」

と口の中で呼んで、自分の部屋をあちこちあちこちと歩いて見た。不図父の言葉を思出した。

はじめて丑松が親の膝下しつかを離れる時、父は一人息子の前途を深く案じるといふ風で、さまざまな物語をして聞かせたのであった。其時だ——一族の祖先のことも言い聞かせたのは。東海道の沿岸に住む多くの穢多の種族のように、朝鮮人、支那人、露西亞人、または名も知らない島々から漂着したり帰化したりした異邦人の末とは違い、その血統は古むかしの武士の落人おちゆうどから伝ったもの、貧苦こそすれ^⑩、罪惡の為に穢れたような家族ではないと言ひ聞かせた。父はまた添付つけたして、世に出て身を立てる穢多の子の秘訣——唯一のぞみつの希望、唯一てだてつの方法、それは身の素性を隠すより外に無い、「たとえいかなる

目を見ようと、いかなる人に邂逅めぐりあおうと決して其とは自白うちあけるな、一旦の憤怒いかり悲哀かなしみに是戒を忘れたら、其時こそ社会から捨てられたものと思え。」斯う父は教えたのである。

一生の秘訣とは斯の通り簡単なものであった。「隠せ。」——戒はこの一語ひとことで尽きた。しかし其頃はまだ無我夢中、おやし「阿爺が何を言うか」位に聞流して、唯もう勉強が出来るという嬉しさに家を飛出したのであった。楽しい空想の時代は父の戒も忘れ勝ちに過ぎた。急に丑松は少年こどもから大人に近いたのである。急に自分のことが解って来たのである。まあ、面白い隣の家から面白くない自分の家へ移ったように感ずるのである。今は自分から隠そうと思うようになった。

(四)

あおのけさまに畳の上へ倒れて、暫時丑松は身動きもせずやがに考えて居たが、馳やがて疲労つかれが出て眠て了った。不図目なかが覚めて、部屋の内を見廻した時は、点けて置かなかつた箸ランブの洋燈が寂しそうに照して、夕飯の膳も片隅しぐれに置いてある。自分は未だ洋服の儘。丑松の心地には一時間余も眠つたらしい。戸の外には時雨の降りそそぐ音もする。起き直って、買って来た本の黄色い表紙を眺め乍ら、膳を手前へ引寄せて食った。飯櫃おはちの蓋を取って、あつめ飯の臭気を嗅いで見ると、丑松は最早嘆息して了って、そこそこにしおしやて膳を押遣つたのである。「懺悔録」ひろを披ひらげて置いて、先ず残りの巻煙草に火を点けた。

この本の著者——猪子蓮太郎の思想は、今の世の下層社会の「新しい苦痛」あらわを表白あらわすと言われて居る。人によると、彼男あのおとこほど自分を吹聴ふいちょうするものは無いと言って、妙に毛嫌なるほどするような手合もある。成程、其筆にはいつも一種の神経質があった。到底蓮太郎は自分を離はなしれて説話はなしをすることの出来ない人であった。しかし思想が剛健で、しかも観察せいちの精緻せいちを兼ねて、人を吸引ひきつける力の壯さかんに溢れて居るということは、一度其著述を読んだものの誰しも感ずる特色なのである。蓮太郎は貧民、労働者、または新平民等

の生活状態を研究して、社会の下層を流れる清水に掘りあてる迄は倦まず撓まず努力めるばかりでなく、また其を読者の前に突着けて、右からも左からも説明して、呑込めないと思うことは何度繰返しても、読者の腹の中に置かなければ承知しないという遣方であった。尤も蓮太郎のは哲学とか経済とかの方面から左様いう問題を取扱わないで、寧ろ心理の研究に基礎を置いた。文章はただ岩石を並べたように思想を並べたもので、露骨なところに反って人を動かす力があつたのである。

しかし丑松が蓮太郎の書いたものを愛読するのは唯其丈の理由からでは無い。新しい思想家でもあり戦士でもある猪子蓮太郎という人物が穢多の中から産れたという事実は、丑松の心に深い感動を与えたので——まあ、丑松の積りでは、隠に先輩として慕って居るのである。同じ人間であり乍ら、自分等ばかり其様に軽蔑される道理が無い、という烈しい意気込を持つようになったのも、実はこの先輩の感化であつた。斯ういう訳から、蓮太郎の著述といへば必ず買って読む。雑誌に名が出る、必ず目を通す。読めば読む程丑松はこの先輩に手を引かれて、新しい世界の方へ連れて行かれるような気がした。穢多としての悲しい自覚はいつの間にか其頭を擡げたのである。

今度の新著述は、『我は穢多なり』という文句で始めてあつた。其中には同族の無智と零落とが活きた画のように描いてあつた。其中には多くの正直な男女が、ただ穢多の生れというばかりで、社会から捨てられて行く光景も写してあつた。其中には又、著者の煩悶の歴史、歎し哀しい過去の追想、精神の自由を求めて、しかも其が得られないで、不調和な社会の為に苦みぬいた懷疑の昔語から、朝空を望むような新しい生涯に入る迄——熱心な男性の嗚咽が声を聞くように書きあらわしてあつた。

新しい生涯——それが蓮太郎には偶然な身のつまずきから開けたのである。生れは信州高遠の人。古い穢多の宗族ということは、丁度長野の師範校に心理学の講師として来て居た頃——丑松がまだ入学しない以前——同じ南信の地方から出て来た二三の生徒